

平成 26 年 12 月 24 日

社会医療法人蘇西厚生会 松波総合病院

1. 施設の概要

所在地：岐阜県羽島郡笠松町泉町 1 1 番地

病床数：432 床（平成 27 年 4 月より 501 床）

一般病床：432 床

（うち ICU:8 床、HCU:20 床、回復期リハビリテーション病棟：55 床、地域包括ケア病棟：55 床）

病院HP：<http://www.matsunami-hsp.or.jp/index.html>

2. 地域及び施設の特徴

松波総合病院が属する岐阜医療圏は、岐阜県の西部に位置し 6 市 3 町（岐阜市、羽島市、各務原市、山県市、瑞穂市、本巣市、岐南町、笠松町、北方町）で構成されています。当該医療圏の人口は約 80 万人で岐阜県の二次医療圏の中で最も人口が多いものとなっています。



松波総合病院は医療・介護・福祉の地域完結型の拠点として、1 日新入院患者数、救急車搬送患者入院率、紹介患者数及び施設からの受入患者数等において県内一となるように目標を掲げていることから、高度急性期医療の提供と地域医療連携に力を注いでいます。

平成 25 年度の実績は、年間の救急搬送件数は 3,527 件、救急入院患者率は 42.5%、総手術件数は 3,526 件となっています。また、紹介患者を迅速に受け入れる体制を整備したことや逆紹介の意識付けと徹底を図っています。それらの実績は紹介率が 63.4%、逆紹介率が 50%となっています。

3. 事業計画の概要

(1) 事業計画に至った背景等

今回の事業計画は、松波総合病院が平成 23 年に災害拠点病院（地域災害医療センター）に指定されたことに伴い、病院新棟建築（当機構の融資対象建物）等の整備を計画するに至ったもので、主な建築ポイントは次のとおりです。

- ① 救急エリアの拡充及び手術室の増加（5 室から 8 室へ増室）
- ② 災害拠点病院としての要件でもあるヘリポートの整備
- ③ 入院療養環境の改善（6 床室の廃止）
- ④ 既存病院施設に回復期病棟他を設置
- ⑤ 既存病院施設へ透析センターを移設（36 床から 60 床へ増床）

これらの整備により、高度急性期医療の一層の充実、急性期医療を後方から支える回復期や療養、障害者病棟等の充実などを実現し、松波総合病院が地域の医療・介護の中

核施設として、その役割を果たすことを目的としています。

(2) 建築の概要

工 期	平成 25 年 1 月～平成 26 年 4 月
建築延面積	17,756.54 m ²
階 数	地上 7 階建て

4. 施設整備におけるポイント

機構融資対象となった病院新棟建築における施設整備のポイントについて紹介します。

(1) 救急エリアの拡充及び手術室の増加（5 室から 8 室へ増室）

病院の立地が以前は幹線道路から少し中に入ったところにあったため、搬送口への進入路が狭く患者の搬送が非効率に行われていました。それを解消するため、幹線道路から直接進入できるようにアクセスを改善できたことから救急搬送の効率化が図られました。

また、ドクターヘリや救急車で搬送される患者を手術室や ICU 病棟等の病棟へ移動するときの効率化を考慮し、搬送するエレベーターから手術室や ICU 病棟等への動線が最短となるように確保し、迅速な移動が可能となるような構造にしたとのことです。

手術室を 5 室から 8 室（内ハイブリッド手術室 1 室）に増加させたことやヘリポートの設置により救急医療が以前にも増して充実しました。

(2) 災害拠点病院としての要件でもあるヘリポートの整備。

松波総合病院が災害拠点病院に指定されたことからヘリポートを設置しています。

病院新棟を開設した平成 26 年 7 月 22 日の翌日には、郡上市からドクターヘリで患者を移送するとの連絡を受け、その約 12 分後には松波総合病院に患者が搬送されたそうです。通常、郡上市から松波総合病院まで車で移動すると 1 時間以上の時間を要するが、ドクターヘリを使用すると通常の 5 分の 1 の時間で搬送できるようになったとのことです。

救急搬送で運ばれてくる患者の処置は時間が勝負であることを考えると、ヘリポートの設置が松波総合病院の救急医療提供の機能向上に大きく貢献していることが分かります。平成 26 年 10 月末現在 5 件の搬送がなされているとのことです。



(D r ヘリ着陸の様子)

5. 施設整備による病院機能の向上

病院新棟が開設して間もないことから、病院機能の向上が実績として現れるのは来年度以降となりますが、今回の病院新棟の建築で見込んでいる効果や目標として、救急医療の充実、療養環境の改善、急性期から慢性期そして在宅という、法人内で一貫した医療と介護のサービスを提供すること及び法人グループ内での機能の分化と高度化を図っていくことが挙げられていました。

医療機能の向上は、先にあげた救急エリアの拡充やヘリポートの整備等のほか、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」等の高度医療機器の導入もあります。「ダ・ヴィンチ」の稼働実績は、平成26年1月～6月の半年間で18件の実績となっています。

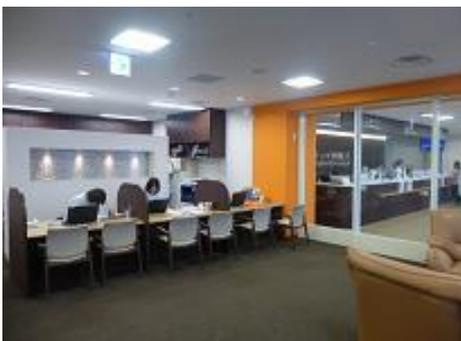
また、法人内で一貫した医療と介護のサービスを提供する態勢整備の取り組みとして、PFM^{※1}（ペイシャント・フロー・マネジメント）の導入があります。今回の病院新棟にはPFMを行うための「入退院センター」を設置しています。

入退院センターは、患者が落ち着いて相談でき、安心して入院できるようにホテルのラウンジ風のスペースとなっていてソファも快適なものが設置されていました。相談室は3部屋あり、隣の話し声が聞こえないように防音対策にも配慮されていました。

1日30～40名ほどの利用があり、相談時間は平均すると30～40分程度、長くても60分以内で相談は終わるとのことです。このPFMも導入したばかりのサービスなのでその効果についても、今後において現れてくるとのことでしたが、PFMの導入により、地域の病診連携、病病連携、医療と介護の連携がさらに強化されていくものと考えられます。

※1 PFM（ペイシャント・フロー・マネジメント）とは

PFM（ペイシャント・フロー・マネジメント）とは、入退院に関連する部門が統合された部門で、患者さんの身体的・社会的・精神的すべてをとらえ、相対的に関わりマネジメントを行うことをいいます。単に病床管理を行うだけでなく、入院前から患者さん一人ひとりの状況を把握するとともに、入院から退院後まで一貫した医療サービスの提供を行うものです。



（入退院センター）



（ダ・ヴィンチ）

6. 今後の課題

松波総合病院は、医療・介護・福祉の地域完結型の拠点として、1日新入院患者数、救急車搬送患者入院率、紹介患者数及び施設からの受入患者数等において県内一の病院を目指しており、その実現に向けて高度急性期医療の提供に努めると共に、地域医療連携の強化を図っていくことを考えています。

具体的な活動目標として、高度急性期医療の提供では再入院率の低下、手術件数の増加、手術室稼働率の向上、ICU稼働率の向上などが挙げられました。

地域医療連携の強化では、地域医療支援病院としての責任もあり、連携医からの紹介を受けるばかりではなく、逆紹介の取り組みを徹底し、逆紹介率の向上を図ることが挙げられました。松波総合病院の紹介率は67%、逆紹介率は53%（各平成26年8月末現在）となっており、地域医療支援病院に係る基準（紹介率65%及び逆紹介率40%）を上回っている状況です。今後はその水準の維持向上に向けた取り組みも課題となっています。

また、平成26年度の診療報酬改定で地域包括ケア病棟が新設されたことから、当初、療養病床として稼働を予定していた60床について、地域状況を検討のうえ、地域包括ケア病棟55床としてスタートしました。

松波総合病院を退院する患者は、主にグループ内の老健や提携先の特養等が退院先となっていることから、自宅等への退院患者割合は97%を維持している状況にあり問題はありませんが、現状の態勢を考慮した場合、地域包括ケア病棟の稼働のほか、今後予定している障がい者病棟の稼働も踏まえた法人全体での医療機能強化と地域連携強化の仕組みを整備していく必要があるとのことでした。

以上